

国際シンポジウム

徳川の平和とその智恵と遺産

徳川家康公顕彰四百年記念事業静岡部会事業実施本部は9月25日、世界史上で類を見ない265年間の平和を実現した徳川時代について考える国際シンポジウム「徳川の平和 その智恵と遺産」を静岡市民文化会館で開催。芳賀徹徳川みらい学会会長を司会に、ロナルド・トビ米国イリノイ大学名誉教授、ボダルト・ベイリー大妻女子大学名誉教授、笠谷和比古帝塚山大学教授、上垣外憲一大妻女子大学教授、タイモン・スクリーチ英国ロンドン大学教授が自身の研究成果と意見を述べ、静岡市民ら400人が聴講しました。



各氏の意見要旨は次の通り。



ロナルド・トビ氏

トビ ● 徳川家康は、豊臣秀吉による文禄・慶長の役の後始末を引き受け、敵対的な関係から平和的な関係に切り替えるために尽力した。12回来日した朝鮮通信使は日本と外国の平和的な関係のシンボルだが、徳川幕府は、朝鮮通信使行列を民衆に見せ、絵師に描かせることで、外国人が日本の武威(軍事力)を怖れて日本に来ると宣伝した。



ボダルト・ベイリー氏

ベイリー ● ケンペルは1690年に来日し、帰国後「廻国奇観」を出版し、徳川時代の珍しさを

西洋に紹介した。これを読んだカントは、講義の中で名君綱吉について話し、「永遠平和のために」の中でケンペルに似た考えを述べた。ケンペルの「日本誌」はトップセラーとなったが、異教の国日本に対する賛美は当時ヨーロッパでは受け入れがたく、彼の原稿を正しく反映していない。



笠谷和比古氏

笠谷 ● 家康政治の特色は、源頼朝以来の武家政治の伝統に依拠した政治というスタイルである。武家諸法度は、鎌倉幕府の貞永式目を意識し、それに時代の変化を考慮した体裁とした。法度伝達の際には將軍が座をはずして林羅山が読み聞かせる形をとり、武家社会の自然法であること

を強調した。また、大名領有権を尊重し、外様大名は一国の完全領有方式として領地を固定し、譜代大名の行政的な転封だけを行った。これらが徳川260年の平和をつくった根本的な原則である。



上垣外憲一氏

上垣外 ● 対馬藩で50年間、朝鮮との外交を担当した雨森芳洲は「誠と信が外交において最も大切」と述べている。その由来は、藤原惺窩が家康の意を受けてベトナムの権力者に送った書簡に求められる。その書簡に「ベトナムからの書簡には信の二語がある。国家を治める上で、誠は最も重要なこと。衣服や言語は異なっても共通するものがある」と書いている。共通するものは、人間性のことであり、西洋の啓蒙思想よりも早い時期に人間性という観念を持ち出している。家康の心の中には惺窩の理想が響いていて、それが徳川260年の平和のもとになった。



タイモン・スクリーチ氏

スクリーチ ● 最初のイギリス船の船長が駿府で家康に謁見し、望遠鏡を献上して帰国した直後、4隻のイギリス船が日本に向かった。日本人が美術品を愛好しているを知

り、船には油絵と版画が積み込まれた。版画のひとつは国会議事堂内の国王を描いたもので、イェズ会の人たちが国王を暗殺しようとして国会に仕掛けた火薬が発見され、国王が神様に守られたことを示していた。イギリス商館長が幕臣にこの版画の説明をすると、翌日にはイェズ会の人たちが日本から追放された。



芳賀 徹氏

芳賀 ● 徳川時代の初期、ヨーロッパでは旧教と新教の対立があり、徳川幕府は、今のような情報網がないなかで、よく判断してオランダを選んだと感心する。イェズ会は九州を占領しようとしていた。日本は、きわどいところをくぐりぬけてきた。

家康から80年後、政治的社会的に安定し、パックス・トクガワナが実現した元禄時代に、戦争状態のヨーロッパからケンペルがやってきて「鎖国論」を書いた。

私たちは、明治維新は徳川が遺した最大の遺産であることを忘れがちだ。阿部正弘は幕府の老中としてアヘン戦争でイギリスがいかに中国を侵略したかを研究した。欧米との戦争は愚であると考えて、開国に踏みきった。徳川日本を見直すことは、現在の日本を考えることにつながり、大変おもしろいと思う。

(文責:静岡商工会議所企画広報室)